小さな教委の大きな挑戦

第2回　奈良県明日香村（あすか）

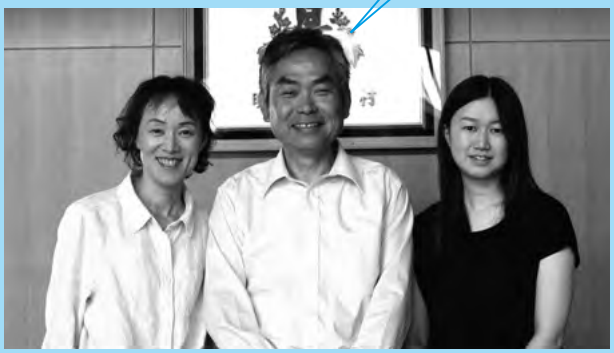
「輝け！　明日香っ子」幼小中連携が第2ステージに！

高松塚古墳や石舞台古墳など、飛鳥時代の古墳が多数点在する奈良県明日香村では、2003年度、幼稚園、小学校、中学校の一貫教育に着手した。
当初は難しかった学校種を超えた連携だが、「郷土を語れる子ども」の育成を目指し、12年間一貫の英語教育や郷土学習、合同の職員研修などを展開している。

明日香村教育委員会
学校指導主事
下住剛士（しもずみたけし）さん

奈良県明日香村
多くの都が6～7世紀に村周辺の地域に営まれ、政治・文化の中心地として栄えていたとされる。村全域に古墳が点在し、自然と文化遺産の保護を目的とした国営飛鳥歴史公園を有する。

- 人口 5,732人
- 面積 24.10㎢
- 幼稚園1園　小学校1校　中学校1校
- 園児児童生徒数　435人
- 電話 0744-54-3636
- URL http://www.asukamura.jp/education/index.html


教育委員会の同僚と事務局にて。

幼・小・中の教員が集まり率直に語り合う

明日香村教育委員会が、村立の明日香幼稚園、明日香小学校、聖徳（しょうとく）中学校の一貫教育を始めてから2016年度で14年目になる。ねらいは、少子化の進行に対応しながら、教育の充実を図ること。目指す子ども像は、「郷土を知り、郷土を愛し、郷土に誇りをもち、郷土を語れる子ども」「夢に向かって、自らの生き方を切り開く意欲のあるたくましい子ども」だ。

今では、村教委と各校の教員、保護者、地域の代表者による推進組織が整えられ、「英語教育」「郷土学習」など、6つの柱で一貫教育が進められている。年間計画も立てられ、各園校の教員が参加する週1回の会議では、それぞれの実践を共有し、課題があればすぐに話し合う。

今年度、村教委の幼小中一貫教育担当に着任した下住剛士学校指導主事が何よりもすごいと感じたのは、幼・小・中のどの教員も12年間を見通した教育の必要性を理解して、明日香村の教育を考えていることだ。

「週1回の会議に参加するのは管理職ではありません。各園校の現場教員が自ら課題意識を持って出席し、幼・小・中に在籍する村の子ども一人ひとりの名前を出しながら、成長した点や課題に感じる部分について率直に話し合っています。まさに、学校種を超えて『村の子どもたちの課題』と捉えて共有していることが、大きな強みになっているのです」

先日は、箸の持ち方の指導が課題に上った。幼稚園では給食が出るため、そこで箸の持ち方をしっかり教えれば、小学校での給食指導がスムーズになる。さらに、箸の持ち方は鉛筆の持ち方にも影響するため、鉛筆も正しく持てるようになることが期待できるという意見が交わされた。

このように、基礎的な生活力が学力にもつながるという意識もまた、幼・小・中の教員間に浸透している。

連携が進んだきっかけは地域住民のあいさつ運動

実は、2009年度に教育課程特例校制度を受け、幼・小で英語活動を始めたが、それだけでは連携の真の重要性が理解されず、取り組みは進まなかった。そこで、村教委が地域に協力を求めて、2013年に始まった

幼・小・中交流音楽会

奈良県教育週間に幼･小･中交流音楽会を開催。村の子ども全員で合唱し、中学校の吹奏楽部は演奏も披露。保護者や地域の人が多数来場した。

地域の人たちと あいさつ運動

あいさつ運動は地域挙げての活動だ。幼稚園児も大きな声で「おはようございます」と地域の人たちにあいさつをする。

合同研修や合同会議を定期的に実施

幼・小・中の合同研修は年４回実施。また、幼小中一貫教育推進委員会の会議は週１回開く。各部会の会議も同日に開催し、連携を図っている。

12 年間一貫 独自カリキュラムを構築

英語教育

郷土学習

英語教育と郷土学習では、村独自に12年間のカリキュラムを作成。幼･小･中の学習の接続と、学習効果の検証を行う。子どもたちは学習の成果を生かし、外国人観光客のボランティアガイドを務める。

幼小中一貫教育推進委員会

- 言語力部会
- 英語教育部会
- 郷土学習部会
- 専門教育部会
- 家庭教育部会
- 学校・地域コミュニティ協議会

のがあいさつ運動だ。「明日香村の子どもとして、生活の基本であるあいさつをしっかりできるようにしよう」と、地域の人々が登校時間に通学路や校門に立ち、子どもにあいさつをし始めた。そうなると学校も動かざるを得ない。全園校の教員が校門に立つようになり、学校間の対話が進むようになった。２014年度には文部科学省「英語教育強化地域拠点事業」の拠点校となり、12年間の独自カリキュラムと教材を作成した。

郷土学習にも力を入れる。幼稚園は「あすかのたんけん」､小学校は「あすか科」、中学校は「明日香学」を設け、地域の自然、歴史、文化、産業などを系統的・総合的に学んでいる。

また、小学５・６年生の理科・図画工作・音楽（音楽は４年生も）は、中学校教員が指導しており、２015年度からは小・中学校の全教員に兼務辞令が発令されている。

これらの取り組みを通して幼・小・中の対話を積み重ね、時間をかけて相互理解を図っていった。下住指導主事は、奈良県教育委員会の指導主事や小学校校長を務めた経験から、小中連携の重要性も、それを進めていく難しさも十分理解している。

「現場の教員は目の前の子どもに全力投球で、長期的な展望を持って指導することはなかなか難しいものです。また、幼・小・中は学校文化が異なるために、互いに理解しにくい面もあります。しかし、明日香村ではそうした壁を超えることができました。今は、一貫教育の良さを真に発揮していく第２ステージに入っています」

子どもが幼・小・中の壁なく、成長していくために

成果はじわじわと表れ、児童・生徒数は前年度より14人増えた。下住指導主事は県内の教育委員会で幼小中連携の状況を聞かれるなど、周囲の関心も高い。次期学習指導要領では英語教育やアクティブ・ラーニング、カリキュラム・マネジメントと、明日香村が取り組みを進める内容が一層重視される。教員の負担感を軽減しつつ、子どもが感じる学校種の壁をできるだけ低くするような連携を図りたいと、下住指導主事は語る。

「私自身は担当１年目。教員や子ども、保護者や地域の人とたくさん話し、連携をどう深化させていけばよいかを考えていきたいと思います」